

# 日本の書芸論

鶴田 一雄

書道の歴史を書道史と言い、理論を書論と言う。中国の書論は、六朝時代に文学論や芸術論が同時期に発生する中で確立された。それらを編纂したのが、唐の張彦遠で、書においては『法書要録』十巻、画においては『歴代名画記』がある。『法書要録』には、六朝時代から唐代までの主な書論が収められている。また、それらについては『中国書論大系』(二玄社)に収載され、詳細な註釈がある。なお、『中国書論大系』には、宋代以後清朝までの書論も網羅されており、それによって体系化がなされたといえよう。

一方、日本の書論については、一般に古代では空海の「書は散なり」や『入木抄』を挙げる。江戸時代では、市河米庵や澤田東江の書論が挙げられる。ただし、江戸期の書論は、中国から移入されて翻刻された和刻本の出版が盛んになり、それらの影響が認められる。全くオリジナルの論ではなく、中国の書論を基礎にして、それに各々の解釈を加えたものである。

明治時代になると、中林梧竹の『梧竹堂書話』があるが、それとて唐の孫過庭『書譜』などの影響が認められる。要するに、日本の書論は、中国の書論に比べて量的にも少ないといわざるを得ない。そこで書に限らず、もつと範囲を広げて文学論や芸術論の中から、注目すべき論を抽出してみたい。それは、中国における書論が、発生期において文学論や他の芸術論に影響を受けたことから、日本においてもそのような視点が成り立つと思われるからである。

そこで、左のように大きく三つに分けて述べてみたい。

- (一) 古代の文学論・芸術論
- (二) 江戸時代の文学論・芸術論
- (三) 近現代の文学論・芸術論

ここでは、(一)を中心に述べる。

## (一) 古代の文学論・芸術論

わが国の文学論は、歌論を中心にして発達した。それは、和歌が文字の中心であったからである。中世になると、連歌論が発達したが、それも歌論の影響が強い。また近世の俳論も歌論や連歌論の強い影響を受けている。しかし、俳諧においては、芭蕉の存在が大きく、彼の出現により芸術として確立したように、俳論もまた芭蕉の出現によって独自の境地を開拓した。

そもそもわが国では、飛鳥から奈良時代にかけては、中国の書物が招来された。その中に詩学に関する『詩経』や『文選』などがあり、それらの影響で『懐風藻』や『万葉集』が編まれた。

平安初期には漢詩文が盛んで、『文華秀麗集』、『凌雲集』、『経国集』などが編纂され、空海の『文鏡秘府論』もそのような流れの中にある。これらの漢詩隆盛の中、和歌復興の機運が出て、『古今和歌集』が登場する。それは、漢詩論の影響を受けつつも、大和歌の本質と基準を出そうとする意図が見られる。

『古今和歌集』の序は、その後の和歌や歌論に対して大きな影響を与え

た。具体的には、真名序に、

動天地、感鬼神、化人倫、和夫婦、莫宜於和歌。和歌有六義。一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌。

とあり、これは、『詩経』の大序に「動天地感鬼神、莫近於詩」とあり、また同書に「先王以是經夫婦、成孝敬厚人倫美教化移風俗」とある。また和歌の六義についても「詩有六義矣」として、項目も全く同文である。『古今和歌集』は、『詩経』に範を求めたことになる。なお、『古今和歌集』真名序の前半部については、同書の仮名序では、

力をも入れずして天地を動かし、日に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女のなかをもやはらげ、猛き武士の心をもなぐさむるは、歌なり。

という。漢文を大和言葉に直したということであろう。ただし、真名序が先か仮名序が先かについては議論の分かれる所である。

一方、平安時代初期から行われた歌合は、批評の基準（判詞）が求められる、歌論を發展させた。中世においては、藤原氏を中心とした貴族の衰退と武士の台頭により封建制度が確立する。特に平家の興亡は、一般の人にも無常観が漂い、その結果仏教に傾倒していく。それが歌論にも影響を与え、幽玄と無心という観念が中心になる。中世歌論では、藤原俊成の存在が大きい。俊成は長命で、激動の世を生き、それが歌論に反映している。俊成の歌論は、子の定家によって進展した。そのような流れの中に鴨長明の『無名抄』がある。なお、古代から近世までの歌論の

展開については、久松潜一校注「歌論集」解説（岩波書店）を参照願いたい。

① 鴨長明「無名抄」（『日本古典文学大系』岩波書店）

鴨長明の歌論書には、「無名抄」と「瑩玉集」がある。「瑩玉集」は短く、未完成ともいわれる。「無名抄」は、七八段の中に歌論、歌話、歌人のエピソードなどが述べられ、随筆的歌論として評価が高い。

その中から注目すべき論を左に挙げる。

- 手を習ふにも「劣りの人の文字はまねび安く、我より上りざまの人の手跡は習ひ似する事難し」といへり。
- たとへば、能書の書ける仮名のし大字のごとし。させる点を加へ、筆を振へる所もなければ、只安らかにこと少なにて、しかも妙なりと。
- 一詞に多くの理を籠め、現さずして深き心ざしを尽す、見ぬ世の事を面影に浮べ、いやしきを借りて優を現し、をろかなるやうにて妙なる理を極むればこそ、心も及ばず詞も足らぬ時、是にて思ひを述べ、僅三十一字が中に天地を動かす徳を具し、鬼神を和むる術にては待れ。

とある。歌を作ることと、手習（学書）とは、基本的に同じであるとの主張である。

② 『風姿花伝』（『日本古典文学大系』岩波書店）

『風姿花伝』は、世阿弥が著した現存する最古の能楽書であるが、一子相伝の書として、観世家、金春家などに秘蔵されてきた。それが、明治四二年、吉田東伍校注の『能楽古典世阿弥十六部集』によって学界に紹介され、昭和二年十一月、岩波文庫に収められて一般に知られるようになった。

『風姿花伝』は七篇から成り、第三篇までは応永七年（二七〇〇年）、世阿弥が三七歳の作である。第四、五篇は、応永九年（一四〇二年）、世阿弥が三九歳の作である。第六、七篇の成立は不明だが、他と同じ頃に成ったと思われる。同書の成立年代について、西尾実氏は、

第三の末で奥書をし、著名をしているところから見ても、以上三篇の内容を組織から見ても、風姿花伝の原形は、一応第三までで完結しているものと思われる。

と述べられている（『能楽論集』解説、岩波書店）。世阿弥は『風姿花伝』の他にも二種の能楽書を著した。

ここでは、世阿弥の『風姿花伝』を挙げるが、それを通読すると、「花」と言う語が頻出する。同書中に、一五六例を数えることができる。その中には、当然のことながら草花の「花」や「花やか」などの修飾語も含まれるが、世阿弥が能楽の理想とした「花」が、それ程までに使用されているのは驚きである。その中で注目すべきものを左に挙げる。

- 時分の花を誠の花と知る心が、眞実の花になほ遠ざかる心なり。

ただ、人ごとに、この時分の花に迷ひて、やがて、花の失するをも知らず。初心と申すはこの比の事なり。（第一）

- されば、肝要、この道は、ただ、花が能の命なるを、花の失するをも知らず、本の名望ばかりを頼む事、古き爲手の、返す返す誤りなり。物数をば似せたりとも、花のあるやうを知らざらんは、花咲かぬ時の草木を集めて見んが如し。万木千草において、花の色も皆々異なれども、面白しと見る心は、同じ心なり。（第三）

- 時分の花・声の花・幽玄の花、かやうの條々は人の目にも見えてれども、その態より出で来る花なれば、咲く花の如くなれば、また、やがて散る時分あり。（第三）

- 先づ、七歳より以来、年来稽古の條々、物まねの品々を、よくよく心中に当てて分ち覚えて、能を尽し、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし。この物数を極むる心、即ち、花の種なるべし。されば、花を知らんと思はば、先づ、種を知るべし。花は心、種は態なるべし。（第三）

- ただ、花は、見る人の心に珍しきが花なり。しかれば、花伝の花の段に、「物数を極めて、工夫を尽して後、花の失せぬ所をば知るべし。」とあるは、この口伝なり。されば、花とて別にはなきものなり。（第七）

- 一、秘する花を知る事。秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず、となり。この分け目を知る事、肝要の花なり。（第七）

以上であるが、世阿弥がいかに「花」という語に想いを託そうとしたかが理解できよう。また、世阿弥の「花」については、表きよし氏は、

世阿弥伝書における「花」の用例は『風姿花伝』に偏っている。このことは世阿弥が思考の進展に伴って「花」から幽玄などの別の概念に論を変化させていったことを意味するのではない。『風姿花伝』で「花」について一応の説明を終えた世阿弥は、後の伝書では「幽玄」や「却来」といった思想を通して、「花」を咲かせることをより高い次元で追求しようとしたのである。

と指摘されている（『國文學』特集世阿弥、第三五卷三号、學燈社）。ただ、世阿弥の論は、自らの役者としての経験から語られたものである。

### ③ 『性靈集』（『日本古典文学大系』岩波書店）

『性靈集』は、空海の漢詩文集である。同書には一二三篇を収めるが、空海の作として確実なものは一〇八篇である。それらは、日本人が書いた漢詩文としては第一級であるとの評価があり、また平安初期の政治、経済、文化、宗教などの状況を知る上でも貴重な史料である。そこで、『性靈集』の中から、注目すべき論を左に挙げる。

● 古人の筆論に云く、「書は散なり」。但結裏を以て能しとするに非ず。必ず須く心を境物に遊ばしめ、懷抱を散逸す、法を四時に取り、形を万類に象るべし。（中略）或が曰く、「筆論筆経は譬へば詩家の格律の如し」。詩に声を調べ、病を避る制あり。書も病を除き、理に会ふ道あり。詩人声と病とを解さざれば、誰か詩汁を編まん。書者病理に明かならずは、何ぞ書評に預らん。（卷第三）

● 良工は先づ其の刀を利くす、能書は必ず好筆を用いる。刻鏤、用に随つて刀を改め、臨池、字に逐つて筆を変す。字に篆隸八分の異、真行草隸の別有り。写するに臨みて規を殊にす、大小一に非ず。物に対し、事に随つて其の体衆多なり。率然として惣べ造ること能くせず。（卷四）

● 字字の法身盈盈たる月の曜を引き、句句の本質は懔懔たる日光を熾にせむ。智鏡を心台に懸げ、醍醐を宝殿に嘗めん。十世の四恩、万方の六趣、有頂無間、鱗服羽衣、氣を吐き身を保ち長眠永醉せるもの、同じく我我の幼炎を覚つて、頓に如如の実相に入らん。（卷七）

初めの「書は散なり」とは、蔡邕の『筆論』の語であり、心の解放を説いたものである。第二の項では、一般に「弘法は筆を選ばず」と言うが、ここでは「能書家は必ず良い筆を用いる」と説いている。第三の項は、文学的表現を用い、『世説新語』の表現とも似ている。

以上、古代の文学論や芸術論を紹介したが、特に世阿弥の『風姿花伝』は、「花」という語に象徴されるように、能楽における理想の姿が集約されており興味深い。